

[自著を語る]

滝内大三著

『女性・仕事・教育』

(晃洋書房、2008)

本書は、19世紀末から20世紀にかけてのイギリス女性の自立とキャリア形成について、中等教育のカリキュラムと国勢調査の職業統計、女性百科全書の内容を通して分析したものである。それに加えて、19世紀末に広く読まれた、ある女性就職案内本の全訳を資料として付している。本書の目的と動機は、「序章」と「あとがき」に詳しく述べた。ここでは、出版後の反省と問題点を書いてみたい。

イギリスの女子教育史といえば、まず問題にされるのが「ガヴァネス」の存在であり、女性中等教員の有資格化と、そのための高等教育機会の拡大が最大の課題とされてきた。そのため19世紀末の女子中等教育も、大学入学に必要な学力形成を最重要課題としていた。それはまた、男女の形式的平等化(男並み)の要求を掲げるフェミニズム運動と連動しており、今日からみれば、手放しでは評価できないものであった。

そこで筆者は、「ガヴァネス」だけが女性に開かれた職業であったのか、また「ガヴァネス」はそれほど否定されるべき職業であったのかを疑うところから研究をスタートさせた。また、トントン・レポートやブライス・レポートでやり玉に上げられた「私営女学校」の実態と、こうした学校と対比される「女子基金立学校」の教育を比較してみようとした。

その過程で、「ガヴァネス」や「私営女学校」が20世紀に入っても、「教育の消費者(教育を受ける権利を持つ人々)」のニーズを受けて、しぶとく生き残っていく姿が明らかになった。また「基金立学校」の教育も、受教育権者のニーズを反映する点では同じであることが分かった。さらに男女の形式的平等化への反発は、『青年期の教育』で有名なハドウ委員会のレポートにも反映していることに気付かされた。

中等教育とオーバーラップする「青年前期」は、ジェンダーへの態度を明確にしなければならない時期でもある。そしてそれは、進学と就職、職業選択問題と深くかかわっており、女性の意思決定と自立の課題が、中等教育のカリキュラムに具体化されている。それゆえ、カリキュラム史の研究をさらにきめ細かく行う必要を痛感した。それと卒業後の進路を追跡し、女性たちのキャリア形成と学校教育の関係を、総合的学際的に明らかにしなければならない。

従来の研究では、イデオロギー面からこの点に切り込む視点が強く、はじめに結論ありきという印象もある。そこで本書では、できるだけ一次史料や統計資料の掘り起こしに努め、データをして語らしめたいと意図した。しかし、1つには能力不足から、また無限に広がっていく領域の性質から、いずれも中途半端なまま結論を示さず投げ出す結果になった点を反省している。

たとえば、女性が選択する多様な職業も教「教育」「医療」「福祉」の領域に収れんするという資料的裏付けは取れても、そのことと「主婦業」を選択して「家事育児」に向かう女性との関係や、そうした領域からはみ出る膨大な数の「事務員」や「店員」と、商人や農夫の妻として働く女性の生き方との関係については、二次文献に頼らざるをえなかった。この部分については、多くの無名の女性の自伝や日記を収集し、彼女たちが家庭や学校さらには社会から具体的にどのような影響を受けたのか。あるいは親として教師として、どのような考え方を持っていたのかを明らかにすべきだった。

そうした課題を残す不十分なものではあるが、バスやピールさらにはブライアント等のパイオニア達が提起した女子教育の理念が具体的にどのような問題を引き起こしたのかについては、ある程度示せたのではないかと思う。またいつものことながら、訳語についての悩みも尽きなかった。『イングランド女子教育史研究』出版から10年以上経過し、日本のイギリス教育史研究の発展は目覚ましいものがある。そのすぐれた研究成果に学び、たとえば「基本財産学校 (endowed school)」は「基金立学校」に、「地方試験 (local examination)」は「地域試験」に改めたが、「カレッジ・オブ・プリセプターズ (college of preceptors)」を今回は「教員認定講習所」と訳した。これが妥当であるか否かは、筆者もいささか自信がない。ただ、本書の注にも述べたように、これが中等教育レベルの学力を認定する機関として機能したことは間違いないし、それが結果として教員資格を認定することにもなった。とはいえ「教員養成学校」と言える実態はなく、また「教員資格認定機関」として教育院の認知を受けていたわけでもない。そこでやや苦しい訳をつけたが、これについてはご批判を待ちたい。

以上であるが、蛇足をひとつ。最近、本書を前にして、ある大学院生と対話する機会があった。その時、母親が「美容師」として、父親が「主夫」として自分を育ててくれたという彼女は、なぜイギリスの女性たちが女性の社会進出にこだわってきたのか分からないという感想を述べた。彼女によれば、酪農家の家に生まれた父は、酪農では食べていけないと思い、美容師として収入が安定していた母に外で働いてもらい、自分は家庭を守って家事育児に生きがいを見出した。それは両親が社会通念に縛られず、自分たちの生き方を自ら選ぶ勇気を持っていたからだと思う。もし父に収入があり、母が家事育児に生きがいを感じていたら、母は専業主婦の道を選んだかもしれない。それぞれの事情を無視して「女性も仕事を持つ」というのは押し付けではないのかと。

「それはあなたが、守られ恵まれた生活をしているからとも言えないか」と言ったが、彼女は「そうかもしれない」と半ば同意しつつ、「でも自分が研究しているメキシコの先住民たちは、ジェンダーより先住民であることにアイデンティティを置いており、その文化に抵触しなければ、その時々で性役割を変えることにこだわらない。ところが、フランスからやってきた女性の研究仲間は、たとえばメキシコ人男性が日本女性の『奥ゆかしさ』をほめると、猛烈に食ってかかる。ヨーロッパの人は、どうして自分たちの価値観をあんなふうに押し付けるのか、不思議だ。」と言った。

女性の院生と男性教師がこうした意見を交わすことに、21世紀を感じたのは私の老化のせいだろうか？